

たまねぎのべと病に引き続き注意！

1 発生状況

- (1) 3月上旬の発生予察調査において、越年り病株が複数ほ場で確認され、早生系品種では2次感染株(図1、2)が確認された(防除情報3月5日発表)。
- (2) 4月15日及び22日での調査(泉州地域・表1)では、べと病の発病ほ場率は60.0%、発病株率は15.5%と、平年値(予察巡回調査地点(過去6年間)の発病ほ場率37.5%、発病株率17.1%)と比べて、発病ほ場率が高かった。



図1 2次感染株(発生初期)
(霜状のかび)



図2 2次感染株
(黄色で楕円形をした一般的な病斑)



図3 2次感染株
(急速に生じ進行した病斑)

2 生態と発生条件

- (1) 越年り病株が感染源となり、3~5月に温暖で降水量が多いと2次感染株(通常のべと病株)の発生が増え、急速にまん延する(図1~3)。
- (2) 気温6~19℃で胞子を形成する。最適気温は13~15℃。
- (3) 気温15℃前後、湿度90%以上で胞子が発芽する。
- (4) 胞子は通常100m、強風時はさらに広範囲に飛散する。

表1 たまねぎべと病の発生状況

調査地点	発病ほ場率(%)	発病株率(%)
泉佐野市 8ほ場	100	21.5
岸和田市 7ほ場	14.3	8.6
平均(15ほ場)	60.0	15.5
(参考)平年値 (予察巡回地点過去6年平均)	37.5	17.1

※調査日(4月15日、22日)

3 防除

- (1) 感染前に予防剤を散布することが重要である。発生を認めたら、発病株を抜き取った後、治療剤を散布する(表)。
- (2) 抜き取った発病株は、次年度の感染源となるため、集めてほ場外に持ち出し、処分する。

表 たまねぎ ベと病の防除薬剤(例) 散布にあたっては農薬のラベルを確認すること。

薬剤名	系統(FRAC)	種類	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数
ジマンダイセン水和剤・ ペンコゼブ水和剤	ジフラカバメート(M3)	予防	400～ 600倍	収穫3日前まで	5回以内
ベトファイター顆粒水和剤	その他(27) CAA(40)	治療 治療	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内
リドミルゴールド MZ	ジフラカバメート(M3) フェニルアミド(4)	予防 治療	500～ 1,000倍	収穫7日前まで	3回以内
ザンプロ DMフロアブル	CAA(40) QoSI(45)	治療 治療	1,500～ 2,000倍	収穫7日前まで	3回以内
ホライズンドライフフロアブル	その他(27) QoI(11)	治療	2,500倍	収穫3日前まで	3回以内
プロポーズ顆粒水和剤	クロロニトリル(M5) CAA(40)	予防 治療	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内
メジャーフロアブル	QoI(11)	治療	2,000倍	収穫前日まで	3回以内

注) ジマンダイセン水和剤及びペンコゼブ水和剤、リドミルゴールド MZ などに含まれる成分マンゼブの総使用回数は、5回以内。ベトファイター顆粒水和剤及びプロポーズ顆粒水和剤などに含まれる成分ベンチアバリカルブイソプロピルの総使用回数は、3回以内。ベトファイター顆粒水和剤及びホライズンドライフフロアブルなどに含まれるシモキサニルの総使用回数は、3回以内。